Case by case

zen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｃａｓｅ　ｂｙ　ｃａｓｅ

【Ｎコード】

Ｎ７７２４Ｔ

【作者名】

ｚｅｎ

【あらすじ】

自分による自分のための自分のＲＰＧは結局破綻してしまうクソゲーだね！というお話です。ｐｉｘｉｖでもやってます。

Ｃａｓｅ１：勇者

例えばこの世界が魔物に溢れ返っていて、その王である『魔王』なる存在が人々を支配しようとしていて、その野望を打ち砕くために都合良く立ち上がった『勇者』なる存在が冒険をする、いわゆる１つのＲＰＧであるとするならば、誰もが間違いなく最初に選ぶ、選ばざるを得ないキャラクターは勿論のこと、話の中心となる人物、この場合『勇者』になるだろう。

そこで私も例に習い、自らの存在がこの物語の中心となるべく、『勇者』となることを選んでみたというわけだ。自らの物語、人生において、自らが主人公ではない、なんてまるで物事を斜めに受け流すような皮肉を常に愚痴る一種のテンプレートとも言える物語の語り部となるつもりなど私にはない。いつだって私の人生は私が主人公であって、世界は私のために動いている。この世界が『魔王』を倒すために存在する世界であるのなら、間違いなく私はその世界の主人公、『魔王』を倒すために存在する『勇者』であるべきだ。

「ふあ……なんて気持ちの良い朝なんだ（棒読み）」

そうしていざ『勇者』となった私は二度寝などとは縁遠い、快適な朝の目覚めを迎え、

「やや！王様が私に呼び出しとな！？（棒読み）」

その国の王から呼び出しを食らい、

「はは！必ずや、この国に、いや、この世界に平和をもたらします！（棒読み）」

自らの使命を言い渡され、『魔王』討伐へと繰り出した。

と、ここまでは至って普通の、いや普通となるように私が演じてや

ったまでなのだが。とにかくごくごく普通のＲＰＧの旅立ちとなってしまったわけだ。
当然、財布の中身も至って普通であり……
「たった１００Ｇ……」
この件に関して、私は前々から異論を唱えたいと思っていた。
確かに、序盤の宿代、武器、防具、道具類は安価であり、むしろ１００Ｇもただで貰えたのだ。感謝の１つでもしてさっさとかわのよろいでも購入すればいいという意見も聞こえてきそうなものだが、私は断固、異論を呈する。
これから戦へとたった一人で赴く者に、それを頼んだ張本人、その上一国の王から支給される軍資金がたったの１００Ｇなど、現実的に考えるとおかしいではないか。
確かに序盤では大金かもしれないが、終盤ではむしろ宿代すらも払えるかわからない額だぞ。
「……納得がいかん」
一人愚痴を零してみるもここはすでに街の外。経済格差への不満をぶつけようともぶつける相手など最早人外しかいない。やはり持ち金を増やすにはそこら中にごまんといる人外を倒すしか術はないのか。
腕を組み、深刻な経済問題を解決するべく脳をフル回転させながら、今にも人外が飛び出してきそうな草原を歩く。東から注がれる午前の光は眩しく、そして気持ち良い。
「しかし午前中に外を歩くなど、本当に久しいな」
普段はもっぱら午後起床のライフスタイルを貫く私が、珍しく午前８時に目覚め、朝食をしっかりと摂り、あまつさえ外出をするなど天変地異の前触れであるかのようだ。
「あの王もたまにはこうして歩けば良いのだ」
いつも椅子に座っているから心が狭くなるのだ。もしも私が王であれば毎朝の散歩は欠かさずに行い、『勇者』に渡す軍資金も億単位で支給してやるだろうに。

「……待てよ……？」
そうか。私が王であればこんなことに悩む必要もないんだ。
「ふむ」
早起きは三文の徳、とはまさにこのことであろう。
朝食をしっかり摂り、外出という適度な運動を行った私の身体はいつにもまして、全知全能の核となる頭、脳に養分を運び、その結果、神懸かった閃きを見せたのだ。
「そうだ、王様になろう」

＊　＊　＊

「……おかしい」
確かに旅立つ際、王様からは軍資金をもらったはずなのだが。
しかもその軍資金を使った覚えなどまったくもってないはずなのだが。
いくら財布を見てもその中身は全く無い。０Ｇだ。これがまた違う種類のＲＰＧならば旅立つ際に、母上から小遣いを貰ったり、隣の家の幼馴染兼ライバルの姉に地図を貰ったりするのだが、あいにくこの世界の魔物は捕まえることなどできないのだ。
赤白のボールさえあれば私も闘わなくて済むのに……。
「やや、待てよ？」
確かこの世界には魔物のＨＰをぎりぎりまで減らして捕まえずとも仲間にするような設定があったような気が……
「そうよ！なんだ簡単じゃない！」
私が魔物になれば苦労して仲間にする必要も、自らの手で苦労して『魔王』を倒す必要もないじゃないか。
「いや待て」
しかしそうした場合私は魔物として勇者に使役される側になるので

はないか。
まあ使役される人生というのもまた1つの形ではあるが、だがしかし納得がいかない。そもそも主人公たる私が誰かに使えるなど我慢ならんではないか。
どうしたものか。
指針を止め、長考していた私に腹時計が鳴り響く。
「……腹減ったな」
あのケチな王のおかげで軍資金は0なのだ。飯も食えたもんじゃない。
……あれ？王様のせいだっけか？いつの間にか0になってたんじゃなかったっけ？
「もうわけわからん！」
やめだやめだ。しっかりと食事を摂ることで脳は素晴らしい閃きをするものだと今朝学んだではないか。あれ？しかし何を閃いたんだっけ？そもそも閃いたんだっけか？
「……やはり食事と寝床はどの世界でも必要ということか」
全知全能たる故にその機能も自らに追いつかなくなったのか、私の脳は記憶すら曖昧なものにしているようだ。
では早速、目の前に見えている宿屋へ泊まろう。
ふかふかのベッドに温かな夕食。
夕食はそうだな、特上のしもふりにくが良い。
しきりににじみ出る涎を何度も飲み込みつつ、空の財布を携え宿屋へと入る。
なあに心配ないさ。私が宿屋になれば全く問題ないだろう？

＊　＊　＊

何なんだあの『宿屋』は。
『勇者』だぞ私は。この世界の主人公だぞ私は。
その『勇者』から1晩３０００Ｇもふんだくろうとはとんだぼったくりだ。
大体３０００Ｇなんて金額で泊まろうとする輩がいるわけがないだろう。アホか。
大方、食事と寝床を提供してやっているのだから当然だ、などという傲慢で浅はかな考えであの額にしているのだろう。
あんな『宿屋』、1秒で潰れても不思議はない。いやむしろ潰れろ。いっそ潰してやろうか。
「くそ！腹が立つのに減るとは我ながらなんという矛盾だらけの身体なんだ！」
当然、持ち金０の私があの後、夕食にありつけることはなく、寝床を見つけることもない。
「こんなことなら私があの宿屋になるべきだった……」
ん？そういやそんなことを以前考えなかったか？
「……よくわからん！くそ！」
空腹と眠気が苛立ちに拍車をかけ、飛び出してくる魔物達はその怒りの矛先となり、もれなくボロ雑巾と化す。
ああ魔物の存在すらも苛つく。そもそも何故この私が世界を平和にしなければならんのだ。それもこれも全部あの『王様』が悪い。王ならば自分でなんとかしようとは思わないのか。
「ええい！鬱陶しい！」
魔物も魔物だ。『勇者』が主人公であるこの世界で、勝てる道理などどこにもないことくらいわからないのか。そんな考えすらも思い浮かばないとは、一体どういう教育を受けてきたというんだ。親の顔が見てみたいね。
「……ん？親？」
待てよ？こいつらの親となる存在、魔物の頂点に君臨するのは当然『魔王』であって……こいつらは『魔王』の命令で動いている、と

いうことになるのか？
だとするなら……
「そうだよ、私が魔王になれば、そもそもこんなに苦労することもないじゃないか！」
根本的な解決の糸口となるであろうその閃きは、私に目の前の魔物を一刀両断する程の強い希望と力を与えてくれた。
……魔物って食べたら美味しいのかな。

Ｃａｓｅ２：王様

例えばこの世界がかのＲＰＧであるとするならば、この世界を動かしている存在は『勇者』であり、『魔王』である。しかしその『勇者』を動かしている存在は何かと考えた時、その答えとして思い浮かぶものは何だろう。『運命』。それも１つの答えだ。だがその『運命』を動かした存在は？『魔王』であろう。そうだな、『魔王』もいいだろう。この自問自答の中でまた１つ答えが出たわけだ。
話が少し逸れたが、『勇者』を動かした存在について『運命』や『魔王』以外にも私の思う所はあるわけで、その答えの１つが『王様』だ。この世界の主人公たる『勇者』を動かした存在の１つが『王様』であるとするならば、それもまた主人公となりえるのではないか。
というわけで私は『王様』になった。
話は冒頭。王たる私が自らの脚で『勇者』の元へと出向くのはまったくもって道理に反している。王はただどっしりとその座に構える。これに尽きる。
「おお、よくぞ来た、勇者よ（棒読み）」
一応労いの言葉の１つもかけてやる。これもまた王たる余裕の内。
「早速だが、世界の平和を取り戻すため、魔王を倒してもらいたい

（棒読み）」
そうしなければ私の世界が『魔王』に奪われてしまうからな。
「さあゆけ！勇者よ！（棒読み）」
ちなみに金はやらんぞ。金持ちなのもまた王たる余裕の内。金を失ってしまえば王は王でなくなってしまう。己でなんとかしたまえよ。
「さあ！さあ！」
何か言いたげな目をした『勇者』を半ば追い出す形で冒険へと誘う。
頼んだぞ、『勇者』よ。私の世界に平和をもたらしてくれ。

Ｃａｓｅ３：宿屋

人が生活をする上で必要となる３つの柱をご存知だろうか。
それすなわち『衣』『食』『住』である。
いくら全知全能と呼ばれる私とて全裸で正座をしているわけでもなく、朝食はどちらかと言えば白飯派であり、掃除は嫌いだがそれなりに広い部屋を必要としているわけだ。ちなみに我が家はセパレートなのにも関わらず、湯船に浸かるのは年に多くても３回である。湯を貯めるのが面倒だからな。その分たまに帰る実家で浸かる風呂が格別となるというメリットもあるぞ。
つまり、私が何を言いたいのかというと、『衣』『食』『住』は確かに生活する上で必要なものであり、世界中の誰もがそれを常に求めているのだ。そしてその求めるものを提供できる存在ともなれば、それは確実にこの世界の主人公に近い存在の１つなのではないか、と考える。
そこで『宿屋』だ。
ＲＰＧの世界において、旅をする者は少なからずいる。いやむしろ

数多く存在すると言っても良いだろう。そこらを歩く個性０のキャラクター達に問い合わせてみると良い。街に必ず一人は「私は〇〇のまちへ行きたいのですが洞窟が魔物で溢れていて通れないのです」という類いの返答が返ってくることだろう。
そんな世界において、人が生活をする上で必要となる３つの柱の内、『食』と『住』を提供できる存在、『宿屋』はこの上なく必要不可欠なものだ。
「というわけで、１晩３０００Ｇになります」
この私が提供してやると言っているのだ。これくらい安かろう。
ほれ、金を出すが良い。
「さあ、３０００Ｇを」
何か言いたげな目をした目の前の『勇者』らしき男が無言で引き返していく。
勇者のくせに３０００Ｇも出せないというのか。とんだ財布のお固い『勇者』様でいらっしゃる。私がもし『勇者』だったなら部品工場に流れるベルトコンベアのごとく流暢な手つきで金をカウンターに置くことだろう。
「まあいいか」
何も客は『勇者』だけではない。いくらでも来る。
そうだ。値段の割にサービスがなってない、などといわれのないクレームを受けないためにも晩飯くらい用意するか。
しもふりにくなど庶民には勿体ない。ほねつきにくでも買いに行こう。流石にくさったにくはまずいからな。
私は当然、常識というものも兼ね備えているのだ。
ついでに自分の晩飯も買おうか。しもふりにくがいい。
「金はあまりないが、まあいいか！」
私が『よろずや』になればしもふりにくくらい無償で提供してやれるからな。
私は当然懐も深いのだ。
『準備中』の札を下げ、私は足軽に外へ飛び出した。

Ｃａｓｅ４：魔王

ＲＰＧの世界において、『主人公＝勇者』という関係性が必ずしも成り立つのか改めて考えてみよう。

『勇者は主人公である』これはほぼ間違いない。そのＲＰＧの世界に『勇者』という存在がいるのであれば、ほぼ間違いなくその『勇者』は『主人公』であるとするのが妥当であろう。『主人公の嫁が伝説の勇者の子孫で、息子が現世に誕生した伝説の勇者である』などといういくつかの例外はあるとしてもだ。やはり『勇者』が登場する限り、その『勇者』がその世界の主人公となる確率は限りなく高いと私は考える。

では逆に『主人公は勇者である』これはどうだろうか。そもそもＲＰＧの世界に必ずしも『勇者』は登場するのか？答えはＮＯだ。

冒険家が旅をする世界、武器商人が世界各地の武器を集め回る世界、魔法に満ち溢れた世界で魔法使いが暴れ回る世界。様々な主人公達がいる。これらの世界に『勇者』は登場することなく物語は進むわけだが、それでも最後は晴れて大円団となる。

そこで私はこう結論付けたのだ。『主人公が必ずしも勇者である必要はない』と。

確かに、この世界はどちらかと言えば『勇者は主人公である』タイプの世界であるとは思う。しかし先程述べた通りそのタイプの世界ですら『勇者は主人公である』という定説が覆され、あろう事か自らの息子が『勇者』となっている。それでも、だ。紛れもなく主人公は息子でもなく、嫁でもなく、奴隷を経験した魔物使いなのだ。そしてその世界は決して破綻していない。個人的な見解を加えさせ

てもらうと数あるシリーズの中でも私はその世界が好きだ。
仮に『勇者は主人公である』という理論がまったくもって正しいとしても、『主人公は勇者である』という理論が正しいとは言い切れないだろう。つまりその時点で『主人公＝勇者』という関係性は成り立たないのだ。
『主人公が必ずしも勇者である必要はない』とするのならば、私が『勇者』にこだわる必要もない。
で、魔王である。
「さあゆけ！魔物達よ！」
色々と小難しい理論をそれっぽく語ったが、何のこともない。
要は支配してしまえば、頂点に君臨してしまえば、誰も否定しようがない、否定すらできない、この世界の主人公となるのだ。
何故こんな簡単なことにもっと早く気付かなかったのか。
「ふはははは！これでこの世界は私のものだ！」
邪魔するものは皆、力で押さえつけてしまえばいいのだ。
例えそれが『勇者』であろうともだ。たった1人でどうにかできるものか。
……いや、それをできそうだから、できてしまう可能性がるから勇者なのか？
「というか、私が勇者になってとっとと降参してしまえばそれでおしまいではないのか？」
そうだよ。私が『勇者』になって降参すれば、最早世界は『魔王』たる私のものではないか。
この短時間でさらにより簡単な策を瞬時に閃いてしまうとは流石私。
「ふはははは！首を洗って待っていろ勇者よ！」
笑いが止まらない。これでこの物語も終幕か。いや、やっとこれで私が『主人公』である、私の物語が、私の世界が始まるというべきか。
いずれにせよ、決着というものは意外と早く、呆気なく訪れるものなのだな。

ここらで決め台詞の１つでも吐いて終わるとしようか。
「私達の人生という名の戦いはまだまだこれからだぜ！（棒読み）」

Ｃａｓｅ５：神様

「……はあ……」
目の前に広がるＲＰＧを象った１つの世界を見ていた私は盛大に溜息をついた。
「なんというＢＡＤ　ＥＮＤだ……」
暇つぶしにＲＰＧを作ってみようと思い立ったのはいいが、なかなか納得のいく『主人公』ができず、それならばといざ『私』を『主人公』にしてみたところ、
「こうなったわけだ」
『主人公』のキャラクターを単に『私』としたおかげで明確な役割、職業が定まらず、結果、この世界の『私』はただ『主人公』という１点のみの漠然とした役割、職業を『私』らしく演じた。世界を上から動かす力を持つ『私』だ。これまでも自らの都合のいいように世界を動かしてきた。
そして同様に、この世界も都合のいいように動かした結果、
「無意識的に世界の全てを私にしてしまった、というわけか……」
『主人公は勇者である』と、とりあえず考えた『私』から始まり、徐々にその周りを都合のいいように自分が演じようと世界を変え始め、そして最後にはまた始まりに戻る。
「世界を都合のいいようにしていった結果、始まりに落ち着いたわけか」
『勇者』も『王様』も『宿屋』も『魔王』も。結局初めから、それ

ぞれが自分の思うままにしたいと願い、行動していた。ただそれだけのことだったのだ。
要するにただのループじゃないか。
記憶を共有することのない『私』達はそれぞれが『私』の考えを持って世界をぐるぐる回している、と。
「とんだ皮肉だな」
『私』がひしめき合う世界で『私』ＶＳ『私』の闘いが勃発したとして決着なぞ着くものか。いや戦いすら起きないかもな。
「私しかいない世界の結末なんて私自身が一番よくわかるぞ」
ループする上に最初から最後までネタバレされ、挙げ句の果てに打ち切りフラグまで立つゲームなんて誰がやるんだ？
暇つぶしといえど、ここまで気分が悪くなると最早別物だな。ただの罰ゲームじゃないか。
やめだやめ。こんなクソゲー・オブ・クソゲーなどやってられん。
「ふん」
世界が３度目のループに入ったのを確認した所で、私は電源を落とした。
セーブはしたのかって？生憎、セーブどころかロードするつもりも金輪際ないさ。

Ｃａｓｅ６：作者

「これはひどい」
とんだ駄作だ。
当初の予定では平行世界やループの要素が混沌と入り組んで、少しずつ自らの考えが変わっていく『魔王』たる自分と、始まりの『勇

者』たる自分が戦う、なんて話を考えていたのだが全く話が展開しなかったではないか。
これはもれなく消去だ。デリートだ。『すべてを選択した』後のコマンドXで全カットだ。
全く無駄な時間を過ごしてしまった。
「とっとと寝よう」
『文書1を保存しますか？』との皮肉めいた親切な問いに、もちろんのこと『いいえ』を選択し、私はパソコンを閉じた。

Ｃａｓｅ７：作者

「なんだこれ」
神が出て来たと思ったら作者たる自分が出る？アホか。やってられん。
ゴミ箱に残すことすら許されんレベルだ。
ゴミ箱の中身を綺麗さっぱり消し去った私は、一連の記憶すらもさっぱり消え去ることを願いつつ、ベッドへと移動した。

Ｃａｓｅ８：作者

もはや何も言うまい。

これ以上続けても終わりが来ない。
終わろう。

Ｃａｓｅ９：作者

この一言に尽きる。
「おわり」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7724t/

Case by case

2011年6月27日19時53分発行